

Museum News

秋田県立博物館ニュース



収蔵資料紹介（地質部門）

ナウマンヤマモモ化石

北秋田市阿仁町羽立の打当層産の植物化石。環日本海地域のおよそ 2000 万年前の地層中に広く産する「台島型植物群」の代表的な化石のひとつです。硬質泥岩、黒鉱とともに、秋田県の「県の石」として、平成 30(2018)年に日本地質学会により選定されました。

目次

表紙・目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P.1

企画展報告・紹介

（報告）継承逸品（うけつがれしぶんかざい）

秋田県立博物館収蔵名品展・・・・・・・・ P.2~P.3

（紹介）秋田の石ころ・・・・・・・・ P.4

企画コーナー展示

（報告）農民文学の作家 伊藤永之介・・・・・・・・ P.5

学芸ノート

（工芸部門）職人の技が織りなす伝統の輝き～秋田銀線細工～・・・・ P.6

（コラム）地球温暖化、異常気象多発の中の博物館・・・・・・・・ P.7

2021 年度 展示スケジュール・・・・・・・・ P.8

継承逸品 (うけつがれしぶんかざい) 秋田県立博物館収蔵名品展

本年度の秋田県立博物館特別展「美の極致—縄文と江戸—」は、新型コロナウイルス感染拡大に伴う移動自粛によって、全国からお借りする予定の展示品について事前調査や搬送の準備が想定通り進まず、万全の体制で開催することが難しいと判断し中止することとなりました。

本展では、本来ならば特別展が実施されている期間中、来館される皆様に少しでも秋田の文化に親しんでいただく機会となることを願って、当館が所蔵する秋田県指定文化財をはじめとした、長く継承されてきた逸品を中心にご紹介しました。

秋田家資料のうちノ谷兜 秋田県指定有形文化財

出羽国の秋田地方を支配した戦国大名である秋田氏ゆかりの兜です。秋田氏は戦国時代には檜山安東氏と湊安東氏に分れていましたが、愛季の時代に両家が合一され、その子実季の時代以降「秋田」を名乗ったといわれています。

写真の兜は戦国時代に武将たちの間で流行した独特なデザインの「変わり兜」のひとつです。源義経が断崖を馬で駆け下り、平家軍に奇襲をかけた「鶴越の逆落とし」で有名な一ノ谷の地形を表現した形であることが名前の由来になっています。一ノ谷兜といえば筑前国福岡藩の初代藩主黒田長政のものが有名ですが、本資料は縦長で山の中央に鑄を立てている点に特徴があります。



当館蔵

【秋田家資料 一ノ谷兜
秋田県指定有形文化財】

男鹿図屏風 秋田県指定有形文化財

男鹿半島西部の風景を描いた屏風です。右隻は本山を中心に鶴ノ崎付近から白糸滝まで、左隻は真山を中心に加茂青砂から北浦・寒風山までを描いています。海岸沿いには船を浮かべ島に上がり、敷物を敷いて飲食を楽しむ人の姿がみえます。右隻の五社堂に至る坂道を参拝者が登っています。道の両側に薬師堂、山王堂など多くの堂社が建っているのは、今日ではみられない光景です。江戸時代には参詣や船遊びで男鹿を訪れる人が多く、自然美と特別な宗教的環境は、今日も観光客を惹きつける男鹿の魅力となっています。堂社の数などから江戸時代前期の作と推測されます。

当館蔵



【男鹿図屏風 秋田県指定有形文化財】

あやめ図透彫正阿弥伝内 秋田県指定有形文化財

銘：表「出羽秋田住正阿弥二代作」裏「享保十八年三月日」

あやめは花菖蒲と外見が似ているので、勝負(菖蒲)に勝つという験担ぎとして、しばしば武家の工芸品のモチーフとして用いられました。本作品はあやめを左右非対称な構図の中に勢いよく立ち上がらせ、流水紋の曲線と繊細に調和させた作品です。蒔絵や象嵌などの華やかな加飾を一切施さず、彫金のみで力強く表現されています。

作者の「正阿弥二代」は正阿弥伝内で本名を鈴木重高といます。初代秋田正阿弥伝兵衛以来長い間佐竹氏に仕えていました。

当館蔵



【あやめ図透彫正阿弥伝内
秋田県指定有形文化財】

鹿角紫根染・茜染

鹿角紫根染・茜染は、奈良時代に伝わったといわれている染色技術です。幕末の頃、鹿角市の花輪と毛馬内には紫根染・茜染の染め屋が十数軒あり、全国的にその名は知られていました。明治期に一旦衰退したものの大正期には栗山文次郎の手によって復興が図られ、その技術は国の記録作成等の措置を講ずべき無形文化財に選定されました。文次郎他界後は息子の文一郎が跡を継ぎ、昭和53年(1978)には秋田県無形文化財の指定を受けました。写真の資料は「紫根染小栴絞着物」です。昭和43年に文一郎によって製作されました。

当館蔵



(館長 高橋 正)

【紫根染小栴絞着物】



身のまわりで見つけられる石について、さまざまな切り口からその面白さを紹介する展示です。硬い石のイメージをやわらかくするため、展示タイトルを「石ころ」としてみました。

◆プロローグ

展示室入口では、男鹿半島の海岸で拾い集めたたくさんの黒曜石を透過光で見られるようにして、石に興味を持ってもらえる導入部としました。(写真1)

◆第1章 石が語る秋田の大地

海岸や川原で拾った石を展示し、それらがどこから来たのか、どのようにしてできたのかを紹介し、秋田の大地の生い立ちを感じ取ってもらうコーナーです。(写真2)

◆第2章 石との出会い

秋田で使われた石材を通して、人はどんな石をどのように使ってきたのかを紹介しました。県外から秋田にもたらされたヒスイやアオトラ石、



写真2【第1章展示風景】

笏谷石や赤みかげ石などには歴史のロマンがあります(写真3)。また、男鹿石の石積みには職人技を、床に敷いた十和田石の青緑色には石材の美しさを感じていただけます。

◆トピック 県の石

このニュースの表紙にも掲載したナウマンヤマモモ化石など、秋田の「県の石」を紹介しました。

◆第3章 石の中から

石をつくる鉱物、石に含まれる化石など、テーマをしぼって紹介しています。男鹿半島鶴ノ崎海岸のおすきいし小豆岩に入っていたクジラ骨化石は必見です。(写真4)

◆第4章 石と遊ぼう

秋田県ジオパーク連絡協議会の協力で、男鹿半島・大湯、八峰白神、ゆざわ、鳥海山・飛鳥の4つのジオパークについて、それぞれの見どころや特徴的な石の紹介を行っています。床面に貼られた東北地方の高精細の地形図も好評です。(写真5)

◆エピローグ 石との遭遇

秋田で発見された3つの隕石とそのエピソードを紹介し、来館された皆さんにとっても石との良い出会いがあるように願いを込めています。

この展示で、石をなかだちとして、秋田の大地と人との関わりに興味を持っていただければ幸いです。快く資料をご提供いただいた方々に感謝申し上げます。

(地質部門 渡部 均)



写真1【男鹿半島脇本海岸の黒曜石】



写真3【アオトラ石原石から磨製石斧まで】



写真4【男鹿半島鶴ノ崎の小豆岩】



写真5【ジオパーク展示風景】

秋田の先覚記念室 企画コーナー展

農民文学の作家 伊藤永之介



伊藤永之介 (1903～1959)

秋田市出身の伊藤永之介は、秋田の風土や農村をモデルとした小説を書き、農民文学の第一人者として大正～昭和期に活躍した文学者です。映像化された作品も多く、名優・森繁久弥主演で映画化された「警察日記」などは、在りし日の市井の姿をいきいきと描写した佳作として、記憶されている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

本展では、永之介の生涯をたどりながら、秋田を描き続けた作家・伊藤永之介の事績を資料展示と解説パネルで紹介しました。

展示資料は、永之介の小説デビュー作の原稿をはじめ、代表的な作品とともに、作品執筆に至るまでの取材メモ、県内在住者へ調査を依頼した書簡などを展示し、創作者としての姿勢が窺えるものとして興味深いと好評を得ました。余り知られていないことですが、永之介は戦時中から戦後の数年間、横手で農村生活を送っており、その頃の書簡や手帳なども、永之介と郷里秋田の強い結びつきを示す貴重な資料として紹介しました。

また、展示に関連した付帯事業として、秋田の近代文学を研究する秋田県立大学教授・高橋秀晴先生をお招きして、講演会「伊藤永之介と八郎瀉」を開催しました。制約の多い状況下にもかかわらず約30名の参加者が、永之介の貴重なエピソードに耳を傾けました。

(秋田の先覚記念室 三浦 たみ子)

展示構成

1. 生い立ち
2. 上京ー作家生活のはじまり
3. 昭和の大凶作から農民文学へー鳥類物
4. 戦時中ー横手でのからし
5. 戦後の伊藤永之介
6. 人気作「警察日記」
7. 晩年の伊藤永之介



【展示の様子】



【永之介の「鳥類物」関係資料(あきた文学資料館ほか蔵)】



【永之介の使っていたもの(秋田県立図書館蔵)】



【講演会の様子】

職人の技が織りなす伝統の輝き～秋田銀線細工～

銀がもつ光沢が魅力的な秋田銀線細工は、秋田市で生産されている伝統工芸品の一つです。平成8（1996）年に秋田県の伝統的工芸品と秋田市の無形文化財に指定されており、令和元年の11月には、天皇陛下即位のお祝いとして本県から秋田銀線細工の香器が献上されています。

芸術性が高く気品ある秋田銀線細工は、鉱山資源の豊富な秋田の地で江戸時代から培われてきた金工技術を受け継ぎ、時代とともに工夫し進化させてきた職人たちの精緻な技法により作り出されます。直径わずか0.2ミリほどの細い銀線を2～3本撚り合わせ、ローラーをかけて平らにすると縄目の線の縁が波状になります。こうして加工した銀線を手先と簡単な道具だけで渦巻状にし、これをやや太めの銀線の枠にはめ込み銀鑑^{ぎんかん}で接着して一つの部材とします。この小さな部材を寄せ合わせたり唐草模様などによるパーツを組み合わせたりして様々な意匠を立体的に形づくっているのです。銀線で成形する技法はもとより銀鑑の扱いにおいても使用する素材の割合や温度管理など作り手の繊細な感覚が必要とされます。

さて、当館ではこの秋田銀線細工による宝石箱を二点収蔵しています。いずれも高坂雄水^{こうさかゆうすい}（本名：水雄^{みずお} 1910～1972）が制作したものです。高坂は、金属を金槌で叩きながら成形する鍛金から始め、当時の商工省が主催する展覧会に22歳で初入選以来数回にわたって入賞を果たしています。その後鍛金から銀線での成形に挑戦し、高度な技術による作品は日展や日本伝統工芸展にたびたび入選し高い評価を得ています。秋田銀線細工は、昭和30（1955）年に国から「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に選定され、高坂雄水はその技術保持者の一人でもありました。

二点の宝石箱のうち一点は八角形の箱全体に菊花と唐草をあしらった作品で、蓋の中央部には渦巻状の部材で作られた花びらをもつ躍動的な菊花が表現されており、その中心に付けられた真珠が銀線細工の華やかさを一層引き立たせています。もう一点は竹の意匠による作品です。同じように唐草を背景に渦巻状の部材で作られた竹の葉が立体的に表現されています。どちらも手のひらにのるほどの大きさですが、銀線を撚ることによって生まれる細かな波が緻密さをより際立たせています。新鮮で華麗な美の作品を生み出してきた高坂雄水の二つの宝石箱は、根強い需要とともに継承されている秋田銀線細工の変遷を辿るうえでも貴重な資料と言えます。

（工芸部門 藤原 尚彦）



【銀線細工宝石箱／高坂雄水作】



【蓋中央菊花部分】



【銀線細工竹葉文宝石箱／高坂雄水作】

コラム 地球温暖化、異常気象多発の中の博物館

地球温暖化の危機が叫ばれてから久しいです。その危機の程度、真偽については諸説あるものの、私たちの周囲で極端な気象現象が多発していることは確かなようです。昨冬は過去40冬季で最小となった雪氷総量でしたが、今冬は数日で1mを超す降雪量を横手市で数回観測しました。「48豪雪」以来の豪雪と言われ、陸上自衛隊が木造校舎の小学校の雪下ろしに出動する事態となりました。秋田市でも12時間降雪量の観測史上最高記録を更新するなど、短時間に極端な降雪が目立つ今冬です。

また夏季の降水量でも短時間での豪雨が目立ちます。「令和2年7月豪雨」では、「統計開始以降最大」という観測値が多発しました。九州では100mmを超す1時間雨量、24時間雨量に至っては500mm近くの降水量が観測されています。

この降水量がどの程度の量なのかを感じるには、秋田県の年間降水量と比較してみるとよくわかります。秋田市や横手市の年間降水量は多い年で2000mm強、少ない年でも1500mm弱です。つまり多い年ではかなりの背高な人の、少ない年では小柄な人の背丈の程度の雨が1年間で降ります。そうすると、1時間で10cm強、1日で50cmほどの雨が降るということが、いかに短時間での豪雨かを感じることができるでしょう。こうした豪雨災害が頻発しているのです。

このような豪雨災害で、全国の博物館・美術館の中には施設が直接的な被害を受けたり、収蔵庫の資料や貴重な文化財が被害を受けたりするケースが出てきています。また、東日本大震災で岩手県陸前高田市の博物館が津波による大きな被害を受け、その収蔵資料復元に向けて全国の博物館が協力したことは記憶に新しいです。これからの博物館は、その貴重な収蔵資料を保存するためにも、様々な自然災害を想定した立地や構造が求められるのかもしれない。

地球温暖化は長期的には確実に進行しており、その土地にあった農作物が変わってゆくであろうことが指摘されています。また、漁獲される魚種も変化するでしょう。リンゴに代表される秋田の果樹も、ゆくゆくはミカンなどの柑橘系に取って代わるかもしれません。秋田の冬の魚の代名詞のハタハタも、このまま日本海の水温の上昇が続くと文字通り「幻の魚」になるでしょう。自然相手の第1次産業の対象物を記録しておくことが、気候変動の中での博物館の重要な役割となるかもしれません。

雪国秋田には、雪が降ることを前提とした様々な建物や民具、そして小正月の行事が存在します。藁製品や馬そりなど、生活様式の変化で実用的な側面からは使用されなくなったものも多いです。そのようなものでも貴重な資料として博物館が収集保存していますが、このまま温暖化が進めば、現在使用している除雪機具などが「かつて秋田で使用していた」貴重な資料になりかねません。雪が必須のかまくらなどの小正月行事も温暖化で安定した降雪がなくなると続けていくことが難しくなるかもしれません。雪国秋田の民俗や文化・歴史を守るためにも、地球温暖化に抗する取り組みを積極的に行いたいものです。

（副館長 柿崎仁志）



【真澄のハタハタの図絵「江戸時代菅江真澄が記録した秋田のハタハタ。江戸時代は小氷期と呼ばれる寒い時代だった。」（館蔵写本）『雪の道奥雪の出羽路』】



冬の藁製品「踏み儀」



箱ぞり「雪国秋田での冬の重要な運搬手段」



リンゴ「秋田県を代表する果樹のリンゴ」（秋田県立農業科学館 提供）



雪の小正月行事「かまくら」（横手市雄物川町 木戸五郎兵衛村）（横手市教育委員会 提供）

企画展・特別展



企画展

美の國の名残

—— 博物館の審美眼

4月29日(木・祝)～6月27日(日)

博物館の収蔵資料を「美」という観点から問いなおします。かつて博物館にあった美術部門へのオマージュとして、美の国秋田に生まれた美意識を探ります。



企画展

秋田野球 ものがたり

7月17日(土)～8月22日(日)

高校野球をはじめ、少年野球、社会人野球、秋田県で開催されたプロ野球の試合を紹介し、秋田県の野球の歴史を振り返ります。また、秋田県人にとっての野球というスポーツの位置付けを検証します。



特別展

秋田藩主歴代の 遺宝展 — 守り継がれた大名家資料 —

9月18日(土)～11月14日(日)

秋田藩主佐竹氏が遺した大名家資料は、その時代の歴史、工芸技術、大名の生活水準などを物語る貴重な文化財です。歴代藩主が筆をとった書画、武具、調度品、古文書など佐竹氏ゆかりの文化財が一堂に会します。



企画展

外来生物

— 運ばれる生き物たち —

12月4日(土)～2022年4月3日(日)

「外来生物」とは何だろうか？

どのような影響を及ぼすのだろうか？

秋田県の外来生物の現状を取り上げ、今後懸念される外来生物についても紹介します。

コーナー展



ふるさとまつり広場 (2F)

① 新緑の季節

～子どもの成長を願う天神人形～

4月23日(金)～5月25日(火)

② 夏のまつり

～七夕絵どうろう～

6月11日(金)～8月31日(火)

③ 秋の夜長を楽しむ

～明かりの道具～

9月10日(金)～11月16日(火)

④ 新しい年に向けて

～干支の人形～

12月3日(金)～2022年2月1日(火)

⑤ 春の訪れ

～ひな人形・押し絵～

2022年2月18日(金)～4月5日(火)



菅江真澄資料センター (1F)

vol.85 大館・真崎文庫の
真澄関連資料

7月10日(土)～9月5日(日)

vol.86 真澄の記録に見る

雨乞習俗

10月16日(土)～12月5日(日)

vol.87 真澄が暮らしたまち

— 秋田市 —

2022年3月19日(土)～5月15日(日)



秋田の先覚記念室 (2F)

近江谷栄次と小牧近江

—— 父子の軌跡

9月25日(土)～11月28日(日)

